

平成18年度企画展

良寛さまと相馬御風

平成18年10月13日から11月12日まで企画展「良寛さまと相馬御風」を開催しました。良寛に関する企画展は、かつて平成4年にも「良寛展」を開催しましたが、今回の企画展では、御風の良寛研究の足跡や親交のあった人々に注目しました。熊木、鳥井両家に伝わる御風資料や、良寛記念館（出雲崎町）、良寛の里美術館（長岡市）が所蔵する御風遺墨、良寛遺墨をお借りし、多くの貴重な品々を展示しました。

また、10月29日には、良寛記念館理事、出雲崎町文化財調査審議委員長を務められている磯野猛氏をお招きし、特別講演会「良寛のまち出雲崎と相馬御風」を開催しました。出雲崎と御風の関わりや良寛の贋作を作った人々など、興味あふれる内容に、聴講に集まった人たちは、大変満足されていました。



大正5年、東京から糸魚川へ戻った御風は、糸魚川中学校（現糸魚川高校）に勤めていた校長の松木徳聚、舎監の山崎良平から良寛の研究を勧められます。そもそも、御風は学生時代、同級生の会津八一から良寛の名を伝え聞いてはいましたが、当時はそれほど興味を持っていませんでした。帰郷の際出版した『還元録』には、研究の対象として、法然や親鸞の名は挙げられていても、良寛の名は一切出てきません。糸魚川に戻ってから、しばらく中学校で、講師を勤めていた時に、松木と山崎から良寛の逸話や詩歌などを教わり、興味をもったのでしよう。

また、糸魚川上刈に所在した牧江家に良寛に関する資料が多く残されていたことは、御風の研究意欲をさらに掻きたてました。牧江家は、糸魚川で酒造業を営む旧家で、良寛の庇護者阿部定珍の第九子靖斎が婿入りした家でもあります。靖斎が婿入りの際には、多くの良寛資料を持ち込まれていたもので、御風は頻繁に牧江家へ通い、資料を閲覧したり、その一部を譲り受けたりしています。

帰郷から一年が経った大正6年、御風は良寛研究をまとめ、「早稲田文学」3月号より6月号まで「大愚良寛」を発表。以後7月号「良寛短歌集はしがき」、8月号から12月号「良寛遺跡めぐり」、大

正7年1月号「良寛和尚逸話」、3月号「円熟期の良寛」と約1年間に渡り、良寛に関する記事を連載しました。「良寛遺跡めぐり」の冒頭を読んでもると、

午前九時四十五分糸魚川発の汽車で、私はいよ／＼良寛遺跡めぐりの旅に上った。雨あがりの空は気持よく晴れ渡つて居た。北日本アルプス連山の雪をいたゞいた頂も、今日は一きは空高く聳えてゐるやうに見えた。近く突立つた山々までが、今日は何だか思ひ切り背伸びしてゐるやうに見えた。海も至つて穏やかであつた。海の方から汽車の窓へそ／＼吹き込んで来る風が、かなり永い間身内に立ち籠もつていた悪暑さからりと私ひ去つてくれたやうに思はれた。私の心全体に静かな興奮が漲り渡つた。

と書かれています。今まで資料や書籍など間接的にしか、良寛を知らなかった御風ですが、良寛ゆかりの土地をめぐること、御風はさらに良寛の魅力に引き込まれていきました。それまでの生活は、偽善と欺瞞に満ちており、身も心も疲れ果てていたと、『還元録』に御風は述べています。「かなり永い間身内に立ち籠もつていた悪暑さ」には、そんな気持ちも含まれていたのでしょうか。御風にとつて良寛研究とは、その疲れ果てた心身を癒し、新たに生きる力を与えてくれるものだったのです。

良寛遺跡めぐりの旅に出た御風は、多くの人々と貴重な出会いをしています。

特に、出雲崎における佐藤耐雪、鳥井儀資、熊木八十太郎との出会いは、見逃せません。

佐藤耐雪は、本名吉太郎、ホトトギス派俳人として有名で、出雲崎における良寛研究の第一人者でもあり、御風の良寛研究を手引きしてくれた人物です。鳥井儀資は、良寛の生家橘屋が出雲崎の名主を務めていたとき、町年寄として橘屋を支えた敦賀屋の末裔です。良寛遺墨をはじめ、橘屋に関する貴重な資料を所有していました。また、熊木八十太郎は、分水の阿部家と親戚であり、江戸時代から続く旅館を営み、御風が出雲崎に宿泊する際、無料で宿を提供してくれました。「木蔭歌集」第三巻第九輯、御風の歌に「初冬遊行」とあります。

- ・ 雨にぬれずべりがちな石段に心はとかくとられむとする
- ・ かさこそと落葉ふみ／＼詣て来し
- ・ この墓にわが詣てしを数ふればはやも十度となりにつらさや
- ・ 冬ざれの廣野の道はほろ／＼し行きつゝ友とさびしみにけり
- ・ かの道を暮れてとぼ／＼通りけむ良寛さまがまぼろしに見ゆ
- ・ 夕雨にけふらふ山を見上げつゝ、五合庵のありどたしかめむとす

これは、昭和6年11月28日、彼ら三人とともに、自動車で良寛の墓や国上山、弥彦を旅した時に詠んだ歌でした。御風には数多くの協力者があり、彼らの協力なくして、御風は良寛研究を進めることはできなかったでしょう。